

日本とデンマーク、両国を経験した留学生の障害者観の変化
～障害当事者の視点で原因を分析する～

医療福祉経営専攻・医療福祉ジャーナリズム分野
井手公正(16S2006)

研究指導教員：大熊 由紀子教授
副研究指導教員：水巻 中正教授



第1章 死の淵から生還
～作業療法士から車いす利用者へ～



2014年の10月22日のことです。

僕は、千葉のリハビリテーション病院で作業療法士として働きはじめて2年目でした。

気がつくと、なぜか、佐賀に居るはずの両親が僕を見下ろしていました。

「お母さんよ」「お父さんぞ」「誰か連絡して欲しい人はおらんね？」
なんとなく状況を把握して、彼女と職場への連絡を頼み、また直ぐに気を失いました。

13本の骨折の痛さと、気胸による息苦しさと、意識が朦朧としていました。

なぜ両親が居るのか、がだんだんわかってきました。

胸から下の感覚が無い事に、気付きました。仕事場に連絡してくれたかどうかを両親に聞いたあと、また意識が無くなりました。

痛みは、モルヒネで誤魔化すことができない程に強烈でした。

ほとんど自分では呼吸が出来ず、意識が薄いまま1週間があつという間に過ぎました。

作業療法士という職業柄、一瞬で「脊損か……」と思いました。

私が乗っていた車は、後部座席が潰れてなくなっており、横に数回転したそうです。僕の身体は、上から6番目の背骨にある神経を損傷し、右の肺が潰れ、13本の骨折があり、頭を何針も縫う重傷でした。

2日ほど意識が無かった間に、2回長い手術があつたとのことでした。

そして、結婚を考えていた恋人との別れ

僕の眼に映った日本社会は、「あなた自由な人、ボク不自由な人」という、はっきり区別された社会でした。

デンマークの「障害のある人とない人が共に学ぶ学校」を知って、何が何でも、行きたいと思いました。

第2章 挑戦と冒険の場 デンマークの エグモントホイスコーレン



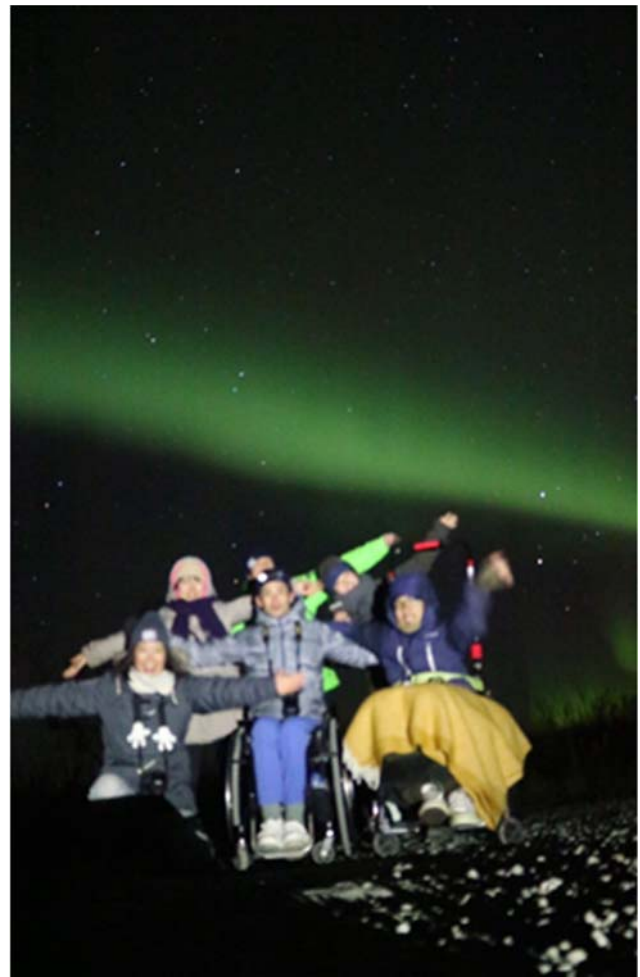
ともに

2018年春セメの日本人学生は、寿司パーティーと日本語教室を開催しました。右の写真は、足が使える障害者が一緒に寿司を作っている光景です。



赤いハンカチを噛んで手を挙げてしている知的に障害があるデンマーク人が、寿司を作ってみみんなで喜んでいる光景です。寿司パーティーといっても、巻き寿司ですが、デンマーク人には、いつも好評でした。

挑戦と冒険



マリンスポーツ



キャンプファイヤー

第3章 11人の証言～日本とデンマークを経験した 青年たちの障害者観の変化



11人への16の質問

- ① 自分が障害者になることが、避けられない事態になった時、どんな思いが去来しましたか。できるだけ詳しく教えてください。
- ② ご家族の反応は、どうでしたか。
- ③ あなたは自身の障害を受容するのに、どれほどの時間が必要でしたか。
- ④ 障害を受け入れるために、役に立ったことがありましたら、列挙してください。
- ⑤ 障害者となったあなたの眼に、日本社会は、どう映りましたか。
(例えば町を歩いてみて、あるいは仕事をしていた時に、あるいは貴方の周囲の人々の振る舞いや恋愛事情は.....等々)
- ⑥ 障害を背負ったとき、一番困ったことは何ですか。
- ⑦ いちばん腹が立ったことは、何ですか。
- ⑧ いちばん嬉しかったことは何ですか。
- ⑨ エグモントホイスコーレのことはどこで知ったのですか。
- ⑩ 入学してみようと思った動機を教えてください。
- ⑪ 入学してみて、新発見がありましたか？「障害者」の印象に変化がありましたか？
- ⑫ 印象が変わったとすれば、なぜだと思いますか？エピソードを書いてくださると助かります。
- ⑬ デンマーク人の障害者に対する態度や見方について気づいたことがありましたら教えてください。
- ⑭ あなたの障害者観は、日本にいたときと、デンマークで暮らしてからとで、代わりましたか？
- ⑮ 変わったとしたら、どう違ったのですか？なぜでしょうか？
- ⑯ デンマーク社会は日本社会と違うなと思ったことを、思いつく限り書いてください。箇条書きでもかまいません。(略)



奥山修平さんから

北海道函館市出身、30歳代の男性。
10代の頃に頸髄損傷を受傷し、四肢麻痺の後遺症を患う。現在も車椅子生活をしており、2016年の夏よりデンマークに単身留学し、2017年末までEgmont højskolenに在籍。2017年の冬に帰国し、留学前からウェブディレクターとして勤めていた会社に復職。

① 自分が障害者になることが、避けられない事態になった時、どんな思いが去来しましたか。できるだけ詳しく教えてください。

今まで当たり前で将来できると思っていたことが叶わなくなるんだなあと絶望を味わいました。なんで自分だけこんなことに、と思いました。

② ご家族の反応は、どうでしたか。

母は取り乱すことなく、医師の説明を聞いていました。母も父も毎日入院中の僕を支えてくれました。

③ あなたは自身の障害を受容するのに、どれほどの時間が必要でしたか。

6、7年かかったように思います。

④ 障害を受け入れるために、役に立ったことがありましたら、列挙してください。

時間は必要でした。健常者の頃の記憶が薄れていくにつれ、障害者である自分が当たり前になり、自分を障害者と思う時間が少なくなりました。

⑤ 障害者となったあなたの眼に、日本社会は、どう映りましたか。(例えば町を歩いてみて、あるいは仕事をしていた時に、あるいは貴方の周囲の人々の振る舞いや恋愛事情は.....等々)

大学に行ったのですが、みんな目を合わせてくれない感じがしました。避けられてる感がすごかったです。

障害者になってからは心の許せる友達ができにくくなったように思います。

⑥ 障害を背負ったとき、一番困ったことは何ですか。

トイレ関係です。

⑦ いちばん腹が立ったことは、何ですか。

僕のことで役所に行ったとき、役所の人僕じゃなく父に説明したのが腹立ちました。

⑩ 入学してみようと思った動機を教えてください。

世界一幸せな国であり、福祉先進国デンマークの進んだ学校を味わってみたいと留学を決めました。

全ての授業、イベントに障害者も参加できること、アウトドアやスポーツ、旅行に行けることが楽しみでした。

⑪ 入学してみて、新発見がありましたか？「障害者」の印象に変化がありましたか？障害者の印象は特に変わりませんでした。障害者とその周りの人との関係性に関して新しい何かを学ぶことができました。

⑫ 印象がかわったとすれば、なぜだと思えますか？エピソードを書いてくださると助かります。

これまでは介助をしてくれる人は主に家族かヘルパーさんだったのが、エグモントでは共に学校生活を送る仲間でした。介助してもらおうということは自分の弱い部分をさらけ出す必要があり、それによって日本にいるときの友達よりもさらに深い関係が築けたように思います。

⑧ いちばん嬉しかったことは何ですか。

最近恋人ができました！

⑨ エグモントホイスコーレのことはどこで知ったのですか。

磯村歩さんのブログ (<https://isoamu.exblog.jp/tags/エグモントホイスコーレ/>) で。

⑬ デンマーク人の障害者に対する態度や見方について気づいたことがありましたら教えてください。

デンマーク人全体なのかわかりませんが、エグモントの人たちに共通してたのは、障害者を特別扱いしないということかと思います。障害者であってもどんな場面でも仲間に入ることができました。

⑭ あなたの障害者観は、日本にいたときと、デンマークで暮らしてからとで、変わりましたか？

変わったと思います。

15 変わったとしたら、どう違ったのですか？なぜでしょうか？

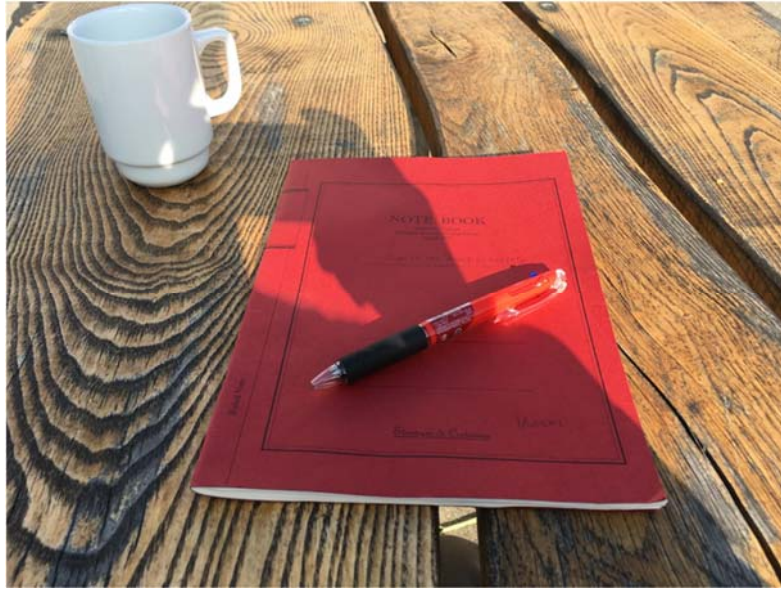
「障害者だから無理」というラインがギョーンと狭まりました。

16 デンマーク社会は日本社会と違うなと思ったことを、思いつく限り書いてください。箇条書きでもかまいません。

- ・税金が高い
- ・社会保障が充実してる
- ・将来の不安がない
- ・肉とイモとパンばかり
- ・あいさつが元気で笑顔
- ・嫌な人がいなかった

第4章 僕自身の障害者観の変化と 障害受容への道

出発時から持ち歩いたこの赤いメモ帳を見て思い出しながら、以下に述べさせていただきます。



1)「一重苦」が「三重苦」に

英語もわからなかった僕は、皆が壁の向こう側に行ってしまったようにも見えてしまいました。英語がわからないと、掲示板が読めません。掲示板の内容の重要度もわかりません。朝礼での、全体への連絡も、わかりません。次に何が起こるかもわかりません。これでは、日常生活が成り立たないのです。

必要な介護用品を買ったり、介護料を支払ったりできないので、お金があつたとしても、無いのと同じの状態なのです。

素っ裸の赤ん坊が、見た目だけ大人の身体に変身してしまったようなものです。

僕は、ガリガリに細くなって、ウンチもオシッコも垂れ流しているうちに、元々持っていた学ぼう、経験しようという素直な感情を維持するのも辛くなっていきました。今振り返ってみると、今を生きることが難しくなっている自分を認める事が出来ず、仲間をも認める事が出来なくなっていたのではないかと思います。

2) 弱者と強者が化学反応を起こしている社会

デンマーク人たちは、相手の全てをありのまま受け入れている印象がありました。他者に干渉しない自立心のようなものが根付いているように感じました。

僕がめちゃくちゃな絵を描いても、不思議なくらい、褒めてくれたり、プロみたいに上手な作品と同じ場所に飾ったりしてくれていたこともありました。

地位や名声、性別や年齢を問わず、みんな真っ直ぐ相手の目を見て笑ったり、対話を重ねたりしていました。僕は何をしてもデンマーク人に怒られた事はありませんでした。

多くのデンマーク人は、18歳を過ぎると親の家から離れる。これもすごい文化でした。この国全体で、基本的に他者に干渉しない自立心のようなものが根付いているように感じました。

3) 修士作品作成を通じて

11人が(大喧嘩した仲間も含めて)

アンケートに真剣に答えてくれて。。

今は、
いまは亡きエグモントのオーレ校長の言葉、
You can do everything, if you wont.
が僕の耳に素直に響くようになりました。

僕の障害の受容は、あと一息、
といった状態まで来ました。